評

井上道義指揮 読売日本交響楽団
マーラー「大地の歌」

心くすぐる助っ人の真剣勝負

井上道義の快進撃が止まらない。「千人の交響曲」、第3番と続いてきた読売日本交響楽団とのマーラー演奏、今回は「大地の歌」である（1月28日、東京芸術劇場）。

時代劇になぞらえれば粋な助っ人か用心棒。瞬時にオーケストラをその気にさせ、一丸となって仕事を終えると、さっそうと風を切って去っていく。乗せられた楽員も大喜びだが、まさにこの真剣勝負とも言える井上の瞬発力が、コロナ禍でバーチャルに慣れた聴き手の心をもくすぐり、あちこちのオーケストラで名演を放ち続けている。

遅めのテンポのなか、ホルンは高らかに叫び、木管は狂喜し、弦の波は揺れに揺れる。その叫喚を、テノールの宮里直樹の声が神がかり的に貫いて聞こえてくる。実演でこんなバランスは珍しい。

テノールによる祝祭的な奇数楽章に対し、アルトの池田香織による偶数楽章はことのほかしっとりと歌いつづられ、長い最終楽章ではオーケストラのモティーフが造形を崩さずに淡々と変遷するなか、沈鬱な詩のニュアンスが克明かつ静かに染みいるような声となって響いてくる。

先立つシベリウスの交響曲第7番は骨太の演奏。白一色の世界の中で淡い光の風景が少しずつ変わっていくというよりも、むしろもう少し濃淡を生かして輪郭をはっきりと縁取る作品像である。

コロナ禍で触れあいにくくなった人間関係をテーマにした藤倉大の「Entwine」は、楽器同士の些細な触れあいが次第に色や空間や集団を変えて輪を広げていく希望の音楽だ。抽象的な描写を可能にする楽器法の巧みさはいつもながらで、それを井上は達者で濃厚な身ぶりで楽員に伝えていた。

（長木誠司・音楽評論家）

評

サカナクション

ところなんだと思う
ん大事さん
に乗せていこ
だと思う」。
そろう共演者
のように、あ
したい」。

「自分の音楽を再確認したい」という時期を再確認したいと思ってい
メ」という時期を再確認したいと思ってい
でも強力に、自分にできることを続け
ていきたい」

8～16日、KAAT。その後県内を巡演。☎0570・015・415

（編集委員・藤谷浩二）

（井上秀樹）

0・545
景・池袋の
起動する。
利せか決
鬼があっ
国土戯曲
が見えて
歩みを持た